

クラス番号	624	担当教員名	竹澤 清
テーマ	障害児の教育を、「実践的に」学ぶ		
著書・論文	著書『人間をとりもどす教育』（民衆社） 『子どもの真実に会おうとき』（全障研出版部）		
研究課題等	『教育実践は子ども発見』（全障研出版部） 『子どもが見えてくる実践の記録』（全障研出版部）		

ゼミナール概要

キーワード： 実践 実践記録 発達保障 子ども発見 実践主体の形成 集団での学び

<目的、内容、方法等>

聴覚障害で、知的な障害を持っている雄二くん（小2）は、まだ数がわからない時、スーパーで、かごに「兄ちゃんのお菓子1袋、自分のお菓子1袋」と入れていた。だが、数がわかるようになったら、「兄ちゃん1袋、自分2袋」と入れるようになった、という。私はその話を聞いて（でかした!）と思った——1+1が単なる数の操作なのではなく、「学ぶとは生きる意欲を強めること」であり、「学ぶとは自分の内面世界が広がること」でもあるからです。けれどもそれは、障害を持つ子どもに限ったことではありません。本来、私たちの学びも同じです。

このゼミでは、障害を持つ子どもたちの生活や発達の事実から学びながら、つねに、「人間とはどういう存在なのか」に立ち戻ることができたら、と思っています。子ども理解・人間についての洞察が、障害を持つ子どもの根幹だからです。そして、そうした学びが、単なる知識やハウツウの蓄積に留まるのではなく、私たちの「実践者としての主体形成」に結びつく、「実践的なもの」でありたいと思います。

そのために ①事実から学ぶ ②集団で学ぶ、ことを大事にします

①は、「実践・実践記録（映像なども含め）から」、そして「障害当事者・家族・関係者の実体験にふれ」、事実即して学ぶ（その際、概念的な「子ども把握」ではなく、「内面理解をともなった、子ども発見」に留意する）。

②は、事実を共有しながら、集団の力によって、お互いの認識を深めていく。

<大まかな流れ>

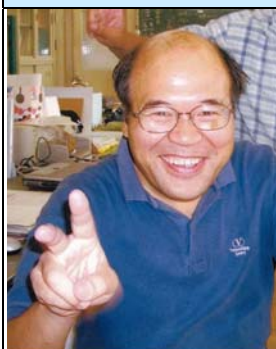
それぞれの時期では、主に次のようなことに取り組みます。

- ・ 3年次の前半——実践にふれ・実践記録を読み合い、発達を保障する実践のイメージを共有します。
- ・ 3年次の後半——実習を含めた実体験を踏まえつつ、文章を書き・発表・討論するなど、卒論にむけ、問題を意識化していきます（必要に応じ、合宿することも含め）。
- ・ 4年次——（自分自身のこだわりを大事にしつつ）卒論のテーマを徐々に絞込み、少しずつ書き、発表し、他のゼミ生からの意見を取り入れながら、言いたいことが書き表せ、他者に伝わる文章に仕上げていきます（そのための援助をします）。

<使用するテキスト>

竹沢清『子どもの真実に会おうとき』（全障研出版部）ほか

担当教員からのメッセージ



以前に、私は、ハローワークの講習で講師をしたことがあります（対象は11人）。受講者は、そこでの4ヶ月の講習を終えると、学童保育の仕事に斡旋してもらえる、というものでした。私はわずか、6日間だけ担ったのですが、「ほんとの学校のように楽しかった」と感想を言ってくれた人もありました。年齢も、職業経験も、住んでいる所も異なる人たちが、同じことを学ぶ。けれども、それぞれの受けとめ方は少しずつ違う。その微妙なズレを楽しみながら、話し合いの中で、自分自身を膨らませていく——という体験・感覚が楽しかったのでしょう。集団で学ぶことの醍醐味はそこにあります。皆さんとの学びは、6日間ではなく、2年間——楽しみです。